

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

鈴木 智

主論文の題目

および

掲載誌・審査委員

題目 Safety and Utility of Kidney Biopsy in Elderly Patients: A Single-Center Cohort Study

(高齢者の腎生検における安全性と有用性)

掲載誌 Journal of St. Marianna University 2015; 6: 235-242

主査 力石 辰也

副査 宮川 国久

副査 松永 光太郎

[論文の要旨・価値] 本研究は、高齢者における腎生検の安全性・有効性を検討することを目的とした。2004年から2011年までに聖マリアンナ医科大学病院腎臓高血圧内科で腎生検を受けた548例を、65歳以上の高齢者群（112例）と、65歳未満の非高齢者群（436例）に分けた。腎生検で得られた組織所見と臨床症状の関連を調べるため、腎生検前の臨床症候群を急速進行性糸球体腎炎、ネフローゼ症候群、非ネフローゼ域の蛋白尿、急性腎障害、血尿症候群の6つに分類した。腎生検は、超音波ガイド下針生検と外科的腎生検に分けた。合併症は、血漿製剤の投与、血管内治療もしくは外科的治療を必要とした出血、動静脈瘻を重症とし、治療介入なく改善した腎周囲の血腫、肉眼的血尿、血圧低下を軽症と定義した。また、組織診断に基づいて、ステロイド剤や免疫抑制剤による治療を受けた高齢者群の割合を調べた。（聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会承認番号3028）。

腎生検前の臨床症候は、高齢者群で急速進行性糸球体腎炎が最も多く（30.3%）、非高齢者群では無症候性血蛋白尿が多かった（55.1%）。高齢者群では外科的腎生検の割合が有意に高かった（11.6 vs 3.0%; $p < 0.01$ ）。経皮的腎生検の合併症は、全体では両群で差を認めなかったが（6.1 vs 7.3%; $p = 0.65$ ）、重症合併症は、高齢者群で多かった（4.0 vs 1.2%; $p = 0.05$ ）。外科的腎生検は両群とも合併症はなかった。高齢者群の病理診断は、ANCA関連糸球体腎炎が最も多く、続いて膜性腎症、IgA腎症等であったが、臨床症候群とは必ずしも関連はなかった。腎生検後にステロイド剤もしくは免疫抑制剤の治療を受けた割合は、ANCA関連糸球体腎炎で91.7%、微小変化群で83.3%と高率であった。高齢者における腎生検は重症合併症に注意が必要だが、治療方針の決定に有用であると考えられた。

[審査概要]

平成28年1月28日に審査を行った。約20分間のプレゼンテーションに引き続き、審査委員による質疑が行われた。腎生検の具体的な方法・統計学的な処理方法・得られた結果の意義などが問われたが、鈴木氏は落ち着いて一つずつ丁寧に回答し、本研究の限界と将来展望についても十分考察していた。質疑応答を通じて、鈴木君は腎臓病学を中心とした豊富な知識と経験を持ち、思考力を兼ね備えた若手研究者と判断された。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

質疑応答を通じて、鈴木君は臨床研究を計画・立案し、遂行するための専門的学識は十分にあると考えられた。引用文献の一部を和訳する英語試験では、与えられた英文抄録を正しく翻訳することができ、英語読解能力は十分と判断できた。